

【会議録】

事業名	令和7年度 第2回市川市文化芸術事業検討懇話会		
日時	令和8年1月19日(月) 15時30分～17時00分	出席者	【委員】小笠原委員、朽木委員、福島委員、 能村委員、小坂委員、鈴木委員 【事務局】文化国際部 文化芸術課
場所	八幡市民交流館ニコット		
種別	<input type="checkbox"/> 交渉 <input type="checkbox"/> 連絡 <input type="checkbox"/> 提案 <input checked="" type="checkbox"/> その他		

【内容】

1. 第2次文化振興ビジョン(案)について

【議事】

1. 基本方針の全体像について

(事務局から説明)

資料1参照

2. 現行ビジョンと次期ビジョン(案)の対照表について

(事務局から説明)

資料2参照

3. 次期ビジョン(案)の特徴と重要ポイント

(事務局から説明)

資料3参照

(意見交換)

〈基本方針の内容について〉

○小坂委員

ビジョンの目標年次として25年は長い。刻みはどう考えているのか。

○事務局

市の上位計画である総合計画に合わせ目標年次を25年にしている。来年度以降5年ごとの実施計画を定める予定。

○朽木委員

総合計画について、他市では12年計画が多い。市川市の総合計画は25年だが、実施計画で整合性を図るという話となっている。

○能村委員

現行ビジョン策定から22年経ち、色々なことが変わった。今後25年は想像がつかない。

○鈴木委員

目標年次が25年ということが気になった。実施計画で5年ごとに社会の変化に合わせたものを作っていくのだろうが、大きなビジョンとしてこれで良いのか。人手不足、人口減少、環境問題、AIとの共存といったことについての記述はあるのか。

○事務局

具体的にそういった観点からの記述はない。

○鈴木委員

さまざまな社会問題がある中でいかに人間が幸せに暮らしていけるのか、というところに文化があると思う。前文などでも良いのでこういった問題について入れるのはどうか。

○事務局

検討する。

○小坂委員

5年の実施計画というのはどういうことか。もともと文化は漠然としたもの。5年間の方向性があると良い。来年度の実施計画に期待する。

○事務局

実施計画は施策に紐づいた具体的な個別の事業を5年ごとに定めていくもの。

○能村委員

今の文化環境について。市川市は東京都に隣接していて、明治、大正時代から文化人が多く住んでいる。そのため文化都市と言っているが、そういうことを言っている世代が高齢化している。次の世代の人にそういう認識があるのか。現行ビジョンを作った人と次期ビジョン(案)を作っている人がつながっているのか不安に感じる。芸術文化団体協議会も一昔前の世代の人で、若い人につながっていない。

○小坂委員

市民アンケート結果はどうなっているのか。

○事務局

アンケート結果は第1回懇話会の資料や市公式ホームページでも見られるので参照いただきたい。

○鈴木委員

文化が継承されているかという話について。基本方針1「地域を彩る文化資源の保全・活用」について、文化資源はハードだけでなく、「人」も含めて継承していくというものにしてもらいたい。

○事務局

ハード・ソフト両方の継承ということで考えている。

○朽木委員

次期ビジョン(案)全体を見ると既存の文化芸術＝ハイカルチャーには十分に対応し、現行ビジョンも踏襲することが見える。国においてはここ20年で文化芸術振興基本法が制定され、文化芸術基本法に改正された。その流れの中で国ではメディア芸術など、ハイカルチャーとは違った毛色のものについても振興を図ると定めているが、次期ビジョン(案)では見えづらい。こういった新しい文化芸術について市の方向性はどうなっているのか。

○事務局

次期ビジョン(案)に具体的な記載はないが、新しい芸術も含めると考えていただいて良い。現行ビジョンでは対象とする分野が非常に幅広いため、次期ビジョン(案)では整理をしている。現行ビジョン策定後に個別計画ができたものについてはそれらと整合性を図り、国や県とも方向性を合わせている。

〈リーディングプログラムについて〉

○小笠原委員

「地域の文化資源をつなぐ共創型ミュージアム都市の推進」の中の、「つなぐ」というのは縦と横につなぐという2つの意味があるということが良いか。

○事務局

そのとおり。

○朽木委員

点をつないで面にしていくというのは良いアイデアだと思うが、実際の市川市は北部・中部・行徳の分断があり、地理的なつながりが希薄であると言われる。実際に点在する文化資源をつなぐということなのか。ICT技術を活用するのだと思うが、ほかに地理的な分断をどうやってつないでいくと考えているのか。

○事務局

現行ビジョン下では点としての施設整備を行い、街回遊展の実施を通じ地域文化の発見につなげた。次期リーディングプログラムでは文化施設を拠点にしたエリアから文化を面的に広げたいと考えているが、具体的には実施計画で考えたい。

○小笠原委員

地域間の分断の話について観光の観点では、地域個性を見出し、差別化し、各地域の売りにするのが基本。地域間の差異を理解し、特徴を見出す。市民でも自分が住んでいないエリアについては意外と知らないことがあるので、街回遊展は地域の特徴を市民に徹底的に見せる良い企画だった。市内外の人を対象とし、市民がそれぞれの違いをきちんと理解できる、それが観光の基本。その精神は次期ビジョン(案)にも生かされていると感じるし、実施計画に違う形で生かされることを期待する。

○小坂委員

資料3、9ページについて。インターネットやSNSの活用を望む声アンケート結果であったとのこと。こういったツールを市として使いこなすと拠点がいくつもあるということが面白いと思う。

[ここに入力]

例えば八幡神社の初詣の様子などでもSNSで発信すると多くの人が見ると思う。人を動かすやり方は20年前よりある。今『散歩の達人』で市川を特集しているが、若い人の目につく方法はいくらかでもあると感じる。

○能村委員

今はSNSの時代。若い人は組織に入って来たがらない。行徳のイベントは人が多く来るのでひとつの成功例だと思う。

○鈴木委員

リーディングプログラムについては広報が大事だと思う。市川市の文化を伝えるためにリーディングプログラムがある。現行ビジョンで整備した文化施設を中心に「共創型ミュージアム都市」を大きく掲げていくことは良いと思う。大きな見せ方が明確になるため、「共創型ミュージアム都市」を打ち出して市の文化を広報してほしい。広報戦略が重要になるが、市内だけでなく市外の人々の注目も集めるように広報してほしい。多言語発信も大事になると思う。

○小坂委員

考古博物館でコンサートをしたことがある。古い施設だが考古博物館、歴史博物館がある市は少ない。新しい施設だけでなく、昔からある施設に人、子どもが集まる発信をしていく。目先にあるもの、地元にあるものを活用するための工夫をすることが大事だと思う。それが市民が喜ぶことだと思う。

○鈴木委員

「街かどミュージアム2.0」は時期を決めて一斉にイベントを実施するというのも考えているのか。

○事務局

市内複数か所でイベントを同時開催するフェスティバルや、テーマを一つ決めて事業を実施するなど、共創型ミュージアム都市として街全体をミュージアムとして捉えながらイベントや事業を展開していくという話も出ている。具体的などころは実施計画でお示しできれば。

○鈴木委員

やはり通年の事業だけでなく、凝縮して、その年のテーマなどを決めて実施すると発信力も高まるので実施計画を考えるうえでは工夫してやってほしい。

〈キャッチコピーについて〉

○朽木委員

「文化が息づき多彩な感性が輝くまち」というのも良いと思う。一方で次期ビジョン(案)では「共創」や「つながり」などがキーワード化されて多く出てくるが、キャッチコピーには「共に」や「つながり」といった関係性について若干弱い。「つながり」や「共創」が入ってきても良いと思うがどうか。具体的に言うと「多彩な感性がつながって輝くまち」はどうか。

[ここに入力]

○鈴木委員

「共に」や「つながって」というのが入っているのは良い。
あまり能動的ではない言葉に感じるので、「共に育む」や「多彩な感性を共に育むまち」など市として主体的、能動的な言葉があっても良いのではないか。「輝く」というのはとても良いと思う。

○小坂委員

市川市は何をやりたいのか。市川市といった時に大きな何かが出てこない。若い人を応援し、みんながつながるといのはわかるが、市川市としてずっとつながっていくものは何か。言葉だけでなくもう少し何かがあると良いと思う。

例えば街回遊展だとみんなが動くイメージがある。祭りは神輿などみんなが集まるというのがわかる。市川市を元気づけようというものは何か。

例えば静岡は大道芸、佐賀は気球で街づくりをしている。行徳に神輿があるので、行徳をもっと打ち出しても良いのではないか。そうすると市川といえば神輿、となる。神輿、常夜燈、江戸川など気持ちをつなぐ具体的なものを置きながらやっていくのが良い。

○鈴木委員

市川市は教育も充実していて、子育てをしやすい街だと思う。公共でないといけない人材育成など「育成」というような言葉を何か一つ入れて良いのではないかと思った。

○小坂委員

国際交流と国際理解の促進についても基本方針にあるが、市川は東南アジア、特にネパールの方が増えていて、インバウンドではなく住んでいる方が今後さらに増えていく。それは市にとっても必要なものになってくるので、交流や相互理解にもっと力を入れているということを発信しても良いと思う。

○事務局

多文化共生という視点をもっと作っていきたい。

○小笠原委員

実際に多文化共生を売りにして観光振興をしている自治体に群馬県太田市がある。多文化共生を地域文化にして観光に役立てたという事例に感銘を受けた。

〈第2次文化振興ビジョン(案)全体について〉

○能村委員

共創型ミュージアム都市はイメージがつかない。説明はわかるが、もう少し良い名前はないか。

○小坂委員

まちかどミュージアム構想はすごくわかりやすかった。共創の漢字を見て、「共」と「創」をそれぞれ理解してまとめてみるとわかる。言葉として少しバラバラになっている。並べてくっつけた感じがする。

○朽木委員

この点について、事務局から何かあるか。

○事務局

ご意見やアイデアをいただくと有り難い。

○小笠原委員

共創型という言葉は良いと思う。共創型ミュージアムというのは良いと思った。他ではあまり見ないので、斬新。みんなで文化振興を共に創るという精神は素晴らしい。自分はすんなり入ってきたが、先ほどのご意見を尊重すると、リーディングプログラムのキャッチフレーズには少し固いかもしれない。「つなげるミュージアム都市の推進」や「みんなでつなげる」というような言葉に変えて、最後に「共創型ミュージアム都市をめざします」としても良いかもしれない。

○福島委員

共創型ミュージアム都市というのは良いと思う。なるべく日本語の方が良い。文化芸術というのは人類の営みが続く限りとても重要なことであることは変わらない。

3年程前から市川に通い、ミュージカルを中心にメンバーと一緒に活動している。市民ミュージカルには市長も出演した。

ミュージカルという視点でいうと障がいのある方のミュージカル、市民向けミュージカル、お年寄りが生きがいを生み出すミュージカルがあるが、建物の中で行われているので近くを通っても中が見えないため広がらない。

ミュージカルをどう知ってもらうかについて1年くらい協議し、昨年コルトンプラザで市川ごたまぜミュージカルパレードを立ち上げた。今年も2月下旬に実施するために準備している。

見える化をして、たくさんの方が「何やってるの?」と立ち止まり、こんなミュージカル、伝統芸能があるのだと知ってもらう。歌って踊れば全てミュージカルと考えているので、伝統芸能の人も太鼓をたたきながらパレードすればミュージカルになる。まだ参加はないが、海外から来た方の民族的なダンスなども入って一緒にパレードをする。楽しいことの中でお互いを知ってつながれる。コルトンプラザで実施するので、何万人の方がそれを見る。

様々な文化活動があるが、なかなか市民全体が共有できるというところまでは広がっていないと思う。

計画や言葉ではなく、市が市民の文化芸術を盛り上げていることを外に対して発信する。市民もそれを知ることによって市川は良いなと思う仕組みを作る必要がある。

例えば、「市川文化芸術の日」というものを定めて、その日に市川の色々な場所で活動を発表し、その活動の助成をすることにより、市川市文化芸術の日を知ってもらう。

見える化やシンボルを作っていくことはソフト面なのであまりお金がかからない。普段の活動を見える化し、市として発信していくことでそのことを知らなかった市民に伝わり、活動している人も誇りに感じられる。

賞を作り、新しい文化芸術活動をしている若い人達や本当の意味で共創の活動をしている人に授与する。今までの文化芸術の賞ではなく、新しい視点で授与することで発信になりシンボルになる。共創型ということのを大きい視点で捉え、市川文化芸術の日を活性化させ、みんなで一緒に楽しむ。地域の企業の方もスポンサーとして来てもらい、地域活性化を図る。行政が音頭をとって、そこに市民が参加する。企業も若い人達の文化芸術活動に賞を与える。行政と市民と企業が共創することによって市川は文

化芸術を応援し、若い可能性にもスポットライトを当てていることをアピールすることで今まで伝わらなかったことも知ってもらいきっかけになる。

教育にも市川文化芸術の日を取り入れる。子どもたちが市川の文化芸術を研究したり、見学に行ったりして発表する。若い人もポジティブに参加できる仕組みを作り周知していくとメディアも取り上げてくれる。これまで活動してきた人に光が当たり、みんなが市川を誇りに感じ、根付いていくと豊かな場所になる。そのようなことができれば、もう一歩進んでいくことができると思う。

○鈴木委員

共創型ミュージアム都市はすんなり入ってきて良い言葉だと思った。政策を行政的に説明するには良い言葉だが、市民に対しては、「みんなでつなぐミュージアム都市」、「地域の文化をみんなでつなぐミュージアム都市」とした方が伝わっていくかと思った。

○朽木委員

共創型ミュージアム都市自体は悪くはないと思うが、今後5年間の実施計画策定時には、「共に」だけでなく、「創る」にも価値創出という意味で力点を置いてほしいと思う。

昔ながらのハイカルチャーは、芸術の受け手と作り手は完全に分かれていた。一方で今は垣根がなくなってきて誰もが作って、誰もが発信していくという時代になった。共感しそれがつながり、さらに輪が広がるようになってきた。

リーディングプログラムの中で「地域の拠点での共創により、だれもが文化に出会い、文化を楽しめるまちへ」としているが、それだけでなく、関わりを作り出すところまで共にできるようになると本当の意味で共創になる。ぜひ創る・生み出すことまで共にできると良い。

拠点や見える化をする仕組みを作り出すことは行政の得意分野だが、拠点を作っただけではうまく機能しない。ハコモノ行政と言われる。

例えば市役所2階にある市民活動支援センター（ものづくり工房&ミーティングスペース）はあまり稼働している様子を見ない。作り出すというとハードルが高いが、単に受け手として楽しむだけでなく一歩踏み出して作る方にも回ってみる。ハコモノの拠点を作っても文化が自生するわけではない。

見える化をする仕組みもそうだが、仕掛けが大事だと思う。市川文化芸術の日もある種の仕掛けだと思う。仕掛け的なものをいかにうまく生み出すかが、最終的に共に創るところまで人々を引っ張り出してくるきっかけになってくる。街回遊展は良い仕掛けになっていた。同日に複数イベントが一斉に行われることによりいろんな楽しみ方ができる。それと同じように今度は創る側として共に創ることで、新しい価値ができる。創る楽しみがつながっていけるような良い仕掛けを実施計画で作れると、本当の意味での共創型ミュージアム都市になるのではないかと。理想として共創型を掲げるのは良いと思うが、ぜひ理想だけでなくそれに見合った仕掛けを作っていけると良いと思う。

（事務局からその他事項について）

本日のご意見を参考に、最終案を作成していく。

最終案作成後、パブリックコメントを実施し、市民の皆様のご意見も反映させたいので本年度末を目途に策定作業を進めていく。